

【発行所】
学校法人 大東文化学園
大東文化大学 入学センター
〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1
☎03(5399)7800 | www.daito.ac.jp/

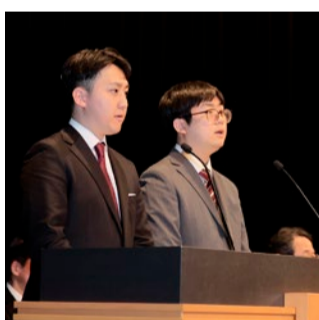
受け継がれる学びのバトン



それぞれの夢を胸に、2,427人が新たな未来へ歩み出す

2,427人が新たな一歩踏み出す～2025年度学位記授与式～

2025年度学位記授与式が3月23日、東京都千代田区有楽町の東京国際フォーラム・ホールAで挙



司会を務めた DHK の竹内健人さん、松井太陽さん

行された。卒業生・修了者総数は2,427人。内訳は、学士課程2,372人(文学部493人、経済学部311人、外国語学部259人、法学部334人、国際関係学部150人、経営学部340人、スポーツ・健康科学部315人、社会学部170人)、

士課程55人。

卒業生代表挨拶で、赤岡拓哉さん(経営)は「大学生活で忘れられない経験がある。それは金融・経済学習コンテスト「日経STOCKリーグ」へ仲間と挑戦したことだ。「投資の哲学」を探る過程は創造的でありながら過酷でもあった。議論が平行線を辿る場面もあったが、互いを信頼し補い合うなかで強い絆が生まれた。最後の一行を書き終えて全員で提出ボタンを押した瞬間の達成感は今も忘れられない。あの達成感があれば、どんな荒波も乗り越えていけると確信している」、川瀬真由さん(社会)は「陸上競技部女子長距離ブロックの一員として4年間活動してきた。仲間と切磋琢磨する日々は、悔しさに向き合う場面も多かった。それでも家族の

ように温かいチームと多くの声援、恵まれた環境に支えられ、日本一に挑み続けることができた。部活動と並行した社会学部での学びは発見の連続であり、社会を構築から見つめ直す姿勢が養われた。対話の積み重ねが社会を形づくり、自分自身と向き合う力につながるのだと学んだ」と大学で得た成長を述べ、未来へ歩み出した。



学位記授与式の様子

新入生3,104人が学び舎へ～2026年度入学式～

2026年度入学式が4月7日、東京都千代田区有楽町の東京国際フォーラム・ホールAで挙



東京国際フォーラムでは2度目の入学式

行され、8学部20学科7研究科3,104人が入学した。学部別の入学者数は文学部730人、経済学部373人、外国語学部415人、法学部377人、国際関係学部242人、経営学部349人、スポーツ・健康科学部383人、社会学部178人。研究科別の入学者数は文学研究科22人、経済学研究科2人、法学研究科1人、外国語学研究科8人、アジア地域研究科4人、経営学研究科5人、スポーツ・健康科学研究科9人(博士課程前期課程・修士課程)。外国語学研究科4人、アジア地域研究科1人、経営学研究科1人(博士課程後期課程)。

新入生を代表し、島村竜平さん(スポーツ・健康科学専攻修士課程)は「大学院での学びは、個人の成長に

とどまるものではなく、仲間や指導者との交流を通じて新たな視野や知識を得る機会でもある。切磋琢磨しながら学びを深め、医療の発展と人々の健康の向上へと還元できる人材を目指したい」、ダヴェタマイカさん(英語)は「高校でラグビーをがんばった結果、高校日本代表に選ばれて、イングランド遠征に参加し、世界のレベルを経験することができた。大東文化大学では、ラグビー部のレギュラーメンバーとして活躍し、チームに貢献したい。また、英語学科の勉強にも力を入れたい」、吉井菜美子さん(中国学専攻博士課程前期課程)は「社会の価値観が多様化するなかで、自ら考え、判断する能力がこれまで以上に求められている。このような時代だからこそ、学問に真摯に向き合い、自分自身を高めていく努力を怠ってはならない」とそれぞれが新たな決意を宣誓した。

【大東文化大学第一高等学校】

卒業生数=324人(男子177人、女子147人)
入学生数=319人(男子186人、女子133人)
生徒宣誓 林 琉々空
東京都知事賞 横川 文音
東京都私立中学高等学校連合会長賞 横原 唯奈
東京都私学財団奨励賞 草川 隼輝
大東文化学園理事長賞 滝澤 慶暉
東京都私学財団文化・スポーツ活動賞 金江 亜沙美

【大東文化大学附属青桐幼稚園】

卒園児数=69人
新入園児=40人(年少39人・年中1名)

入学式 学長挨拶

多様性を尊び続けた学び舎で 次代を切り拓く力を育もう

大東文化大学は1923年、帝国議会の決議によって創設された大東文化学院を前身として

創設の背景には、「東洋の文化を基礎としつつ西洋の文化を吸収し、東西文化の融合によって新しい文化を創造する」という有識者の強い思いがありました。明治維新以降、日本社会は近代化を進める一方で、自国の文化やアジアの文化を見つめ直す必要性も高まってきました。本学の開学の必要性を示した有識者たちが「ゆるぎないアイデンティティに基づいて西洋文化の良さを吸収していく」ことの意義を唱えたのは、そのためだとも言えるでしょう。この考え方は、現代でも通用する価値観です。開学以来一貫して多様性の重要性を訴え続けてきたことこそ、本学の大きな特色であると言えるでしょう。

現代社会は、多くの課題を抱えており、次の時代に向けてどのような選択をとるべきかが問われています。しかしながら、文部科学省が公表した「第12回科学技術予測調査 ビジョンング総合報告書」(2023年9月)では、若者世代を中心に「ありがたい」「望ましい」と考える多様な未来像(2045～55年頃)として、次のようなビジョンが示されています。

- ①ありのままの姿や多様性・違いを認め合い、他者への尊敬と共感によって支え合う社会
②偏見のないまなざしを持つ人々に満ち、違いや多様性を認め合うことで、誰もが疎外感や社会的抑圧から解放されている社会
③高い倫理観のもと、偏見のない形で科学技術が推進され、多様性と社会参加が促される社会
④すべての人・ものを尊重し、深いやさしさと共

感によって他者の幸せに寄与しようとする利他的な社会

- ⑤属性や違いを気にすることなく、対等な立場で支え合いながら物事に取り組む社会

これらの未来像は、建学の精神や本学の教育理念そのものでもあります。さまざまな課題が存在する現代においても、人間にとって本質的に重要なことは、異なる文化を理解し、互いを敬う姿勢です。これは本学が創立以来重視してきた精神でもあります。

ところで、一万円紙幣に肖像が描かれている渋沢栄一のことはご存知でしょうか。渋沢は、本学の大東文化協会評議員として漢学振興に尽力された人物でもあります。彼の名著『論語と算盤』には、次のような言葉があります。「得意時代だからとて気を緩めず、失意の時だからとて落胆せず、情操をもって道理を踏み通すように、心掛けて出ることが肝要である」



入学式で式辞を述べる、高橋進学長

つまり、「調子が良い時も油断せず、うまくいかない時も落ち込まず、どんな時でも正しいことを続ける姿勢が大切だ」ということです。そして、その「正しいことを続ける力」の源こそが、大学での学びなのです。どうか、これからの一瞬一瞬を大切に過ごしてください。

最後になりますが、新入生の皆さんは無限の可能性に満ちています。そのことを、ぜひ皆さん自身の力で実感してほしいと思います。そして、社会に貢献できる人材として大きく成長されることを心より期待しています。

令和7年度板橋区文化スポーツ国際交流栄誉賞

顕彰者一覧(敬称、学科・学年略、順不同)

大東文化大学

【優秀賞】文化部門

〈個人〉書道 木村幸咲、廣瀬光汰、若松秀磨、大澤葵心、原二葉

【優秀賞】スポーツ部門

〈個人〉スケート部 北原伊織、高橋侑花、賀来春音、菊池仁貴、鈴木花梨
陸上競技部 女子長距離 サラワンジル、野田真理耶
テコンドー部 加藤貴士、加藤柚帆、富田智咲
空手道部 近藤拓人、井上史崇
ビーチバレー競技 伊藤碧紀

〈団体〉スケート部、テコンドー部

【奨励賞】文化部門

〈個人〉書道 西野真央、西嶋香菜、宮口拓己、渡部葉月

〈団体〉ダンス部

【奨励賞】スポーツ部門

〈個人〉スケート部 横山颯介、駒野智哉、蟻戸丈生、中捨朝陽、黒岩修成、林ひよな
テコンドー部 北出達也、諏佐人和
空手道部 杉田徳也
バスケットボール部 パラダランタホリ玲依

〈団体〉陸上競技部/軟式野球部

大東文化大学第一高等学校

【優秀賞】文化部門

〈個人〉岡田紗希、田中光栄、金江亜沙美、中西美裕、柳沼柊吏、安藤夢、甲田空羽

【奨励賞】文化部門

〈個人〉滝澤慶輝、久保晴輝、松本明和、矢嶋友稀、齋藤琴朱、松田葉月

〈団体〉書道部

東松山市スポーツ功労賞

顕彰者一覧(敬称、学科・学年略、順不同)

〈個人〉スケート部 吉澤柊威、齊下功聖、北原伊織、鈴木花梨、賀来春音、菊池仁貴、横山颯介
テコンドー部 磯崎翼、北出達也、加藤柚帆、河西将生、諏佐人和、鈴木小春、館野大悟、菅井奏、富田智咲、加藤貴士
陸上競技部 女子長距離 サラワンジル、野田真理耶
陸上競技部 短距離 守祐陽
空手道部 近藤拓人、杉田徳也、井上史崇

〈団体〉スケート部/テコンドー部/軟式野球部/陸上競技部 女子長距離/陸上競技部 短距離/アイスホッケー部/ダンス部

令和7年度桐門スポーツ賞

顕彰者一覧(敬称、学科・学年略、順不同)

最優秀団体賞

テコンドー部

優秀団体賞

スケート部/アイスホッケー部/ダンス部

特別団体賞

空手道部

最優秀個人賞

テコンドー部 加藤柚帆、加藤貴士、富田

智咲
スケート部 鈴木花梨、北原伊織、菊池仁貴、賀来春音

優秀個人賞

テコンドー部 磯崎翼、北出達也、河西将生、諏佐人和、鈴木小春、菅井奏、館野大悟
スケート部 吉澤柊威、蟻戸丈生、中捨朝陽、黒岩修成、齊下功聖、横山颯介
アイスホッケー部 齊藤世龍、宮脇星太、毛塚大翔、北条怜央、川守田翔太
男子バレーボール部 野添凌
軟式野球部 鈴木大弥、麻生亮太、安道駿太、藤巻飛雅、奥野翔真、久保井悠成、門前希、遠田恵果
空手道部 杉田徳也、近藤拓人、井上史崇

特別個人賞

陸上競技部 男子長距離 入濱輝大
スケート部 白川弘、小山香月
男子バレーボール部 川中太翔
女子バレーボール部 宜保あいる
硬式野球部 土野奏、真庭和志、市村洸宜

2025年度学長賞

顕彰者一覧(敬称、順不同)

- 大田潤(書道学科4年) 第118回日展 第五科(書)入選
廣瀬光汰(書道学科4年) 第118回日展 第五科(書)入選
西野真央(書道学博士課程前期課程2年) 第118回日展 第五科(書)入選
宮口拓己(書道学科4年) 第66回全国書道展 外務大臣賞

守祐陽(現代経済学科4年)

2025世界陸上競技選手権大会 男子100m 予選2組7着

磯崎翼(国際関係学科4年)

テコンドー2025年度台中国際オープン大会 男子68kg級3位

北出達也(国際文化学科4年)

2025WTテコンドー世界選手権 男子54kg級 出場

加藤柚帆(スポーツ科学科4年)

2025WTテコンドー世界選手権 女子53kg級 出場

2025年度青銅賞

顕彰者一覧(順不同)

〈団体〉

■新入生歓迎特別実行委員会

新入生歓迎イベントの企画運営により、学内コミュニティの活性化に大きく貢献。多くの団体に構成員増を達成し、昨年度を上回る新入生の課外活動参加へと繋げた。

■防災研究同好会「STERA」

地域の防災意識向上に尽力し、令和7年度「板橋区青少年表彰」を受賞。社会貢献性の高い活動を通じ、地域社会への寄与と大学の名声向上を両立させた。

あ ら か る と

■新聞・雑誌

▽滝口明祥日本文・准教授「【独自】井伏鱒二、75年ノーベル賞候補 公式確認、戦争文学評価か」<1・4共同通信>
▽齋藤百合子国際関係・特任教授「買春側を罰せず、日本社会の課題 タイ少女の人身取引事件から考える」<1・11朝日新聞>
▽鈴木真弥国際文化・准教授著「ずさんな空調工事に垣間見たカスタ意識と職業訓練の壁」<1・26週刊エコノミスト 2026年2月3日号>
▽川名晋史政治・教授「『本音は継続使用』普天間飛行場 国連軍、直視し議論を」<2・17琉球新報>
▽千葉一幹日本文・教授「『思考の現場から』連載終了に寄せて 山形で得た視点 物書きの礎」<2・18山形新聞>
▽齋藤百合子国際関係・特任教授「『男性の性欲はあって当たり前』という社会が何百年も続く 売る側にしか罰則がない法制度の背景を専門家が解説」<3・5AERA DIGITAL>
▽福島洋一健康科・教授「コーヒーは1日何杯まで? 認知症・糖尿病・肝がんリスク低減のデータも、専門家が教える“健康に効く飲み方”」<3・10週刊女性 2026年3/24・31号>
▽福島洋一健康科・教授「Pick Up 飲めば得するコーヒーの話」<3・10PHPからだスマイル 2026年4月号>

■出演・講演

▽陸上競技部短距離 部員「タイムリミットコロシム即攻」<1・8日本テレビ>
▽宮瀧交二歴史文化・教授、落合義明歴史文化・教授、野瀬元子歴史文化・教授「ひるどき!さいたま〜ず」<1・22NHKさいたま放送局>
▽川名晋史政治・教授「在日米軍研究の第一人者・川名晋史『助けは“時価”』」<3・18TBS CROSS DIG with Bloomberg>

在学生が交流イベントを実施 新入生たちが一歩踏み出す

2月20日、本学の板橋キャンパスで「はじめてのDAITO新入生スタートイベント」が開催された。4月に入学を控える高校生を対象に、大学生活への不安を和らげ、早期に仲間づくりができる場として企画されたもの。当日は午前・午後の2部制で実施され、多くの参加者が来場した。

受付では在学生スタッフが笑顔で迎え、緊張気味の高校生を丁寧にサポートした。イベントはアイスブレイクから始まり「好きなものインタビュー」と題したグループワークへと進行。続いて、在学生による大学生活紹介が行われた。授業の様子、課外活動の雰囲気、アルバイトとの両立など、実体験に基づく具体的なエピソードが語られ、参加者は熱心に耳を



春からの新入生が板橋キャンパスに集結

傾けていた。学部別の交流時間では、履修の組み方や学びの特色など、より専門的な話題について意見が交わされた。

参加者からは「今日のメンバーと再会するのが楽しみになった」「授業のイメージが湧いた」「他学部の友達もできて安心した」といった声が寄せられ、イベントは終始和やかな雰囲気に包まれた。

《2026(令和8)年度 学校法人大東文化学園 基本方針・行動計画》

◆2026年度(創立103周年)の学園の基本方針

2024年度の出生数が当初の国の推計よりも14年も大幅に前倒しされる形で70万人を割ることとなり、1985年度の半数以下、そして2022年度に80万人を割ってから僅か2年で約10万人が減少したという急速な少子化の現実、本学がこの先も永続的に存続する上で直視して対応すべき喫緊の課題です。こうした急速な少子化の進展やデジタル化の進展等を背景に、国等では高等教育、初等中等教育、幼児教育について様々な検討や提言が行われています。特に、2025年2月に中央教育審議会より示された「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)」では、教育研究の「質」の更なる高度化、高等教育全体の「規模」の適正化、及び高等教育への「アクセス」の確保という大きな3つの柱に基づく各種改革の方向性が示され、今後の高等教育政策が大きく転換

していくことが見込まれます。

本学は創立以来、「東西文化の融合」を建学の精神に掲げ、また時代の変化に対応する新たな理念として「多文化共生」を掲げ、今日まで国内外に開かれた教育研究に取り組み、2023年度には創立100周年を迎えることができました。今後も本学が存続していくためには、教育研究面における更なる質の向上のみならず、ICT基盤を活用したDXの推進、海外からの留学生等の更なる積極的な受け入れ、及びリカレント教育の推進等、広く社会に開かれ、社会のニーズに対応し、その期待に応える教育研究機関としての位置付けをこれまで以上に高めていく必要があります。また、大学より先に少子化の影響を受ける高校と幼稚園においても、教育無償化などの制度改革や社会のニーズの変化に迅速に対応しながら、本

学の特徴を生かした教育プログラムの提供に努めるとともに、教育力の一層の向上を図っていく必要があります。そしてこれら活動を支える管理部門では、私学法の改正により強化されたガバナンス体制の着実な実行や自己点検・評価活動を始めとする内部質保証体制の充実により、健全な組織運営を図っていくことが求められます。

本学園としてはここで示した方針に沿って、必要な事業を検討・精査し、これまで以上にスピード感を持って着実に実行していくことが求められています。

2026年度も引き続き、学園の中長期計画である「DAITO VISION 2033」を基軸とした各種計画を着実に遂行し、大きく変化していく社会からの要請にも応えられるよう更なる改革に取り組み、次の10年、100年に向けた一層の飛躍を目指すこととします。

◆2026年度の設置校及び法人事務局の行動計画及び重点的取組事項

※各行動計画の末尾の★印:重点的取組事項

大東文化大学	
1.110周年の大学像を実現するための戦略的取組事項 (1)組織全体が健全で豊かに活動できる環境の整備・増進 (2)中長期計画「DAITO VISION 2033」の推進・検証★ (3)改正大学設置基準に対応した教学改革の推進 (4)4年間同一キャンパスの検討 (5)大東ブランド力の強化★ (6)学部学科の定員管理の検討★ (7)大学院の定員管理に向けた教育・研究環境の整備★ (8)全学的な基礎教育の再編と運営体制の見直し (9)入学定員の安定的な確保に向けた入試改革の推進及び広報・情報発信の強化等★ (10)「高大連携・提携」事業(プログラム)の推進 (11)学外支援者との連携強化	(11)キャリア教育(インターンシップを含む)と就職支援プログラムの強化★ 3.研究推進による知の交流拠点の構築 (1)学内外研究ネットワークの構築と活性化 (2)研究体制を強化するための研究所のあり方の検討★ (3)「多文化共生」「SDGs」をテーマとした中長期的共同研究プロジェクトの推進 (4)研究支援体制の構築 4.社会実践と多様な文化の交流によるGlobal&Localな学びと貢献 (国際化戦略の構築と推進) (1)交流協定校との連携の強化 (2)外国人留学生、派遣留学生に対する支援の推進 (3)非漢字圏留学生を対象とする日本語教育プログラムと学修支援制度の開発(地域連携と社会貢献活動) (4)自治体との連携・協働の推進と研究教育交流の促進 (5)企業との連携推進★ (6)オープンカレッジ・公開講座の充実 (7)埼玉東上地域大学教育プラットフォーム(TJUP)等との連携事業の展開 (8)他大学との連携、教職員交流の推進 (9)学生・教職員の社会貢献活動への支援 (10)リカレント教育の推進★
2.教育改革による理念の具現化と学修者本位の教育の実現(学修支援の拡充) (1)学修者本位の教育を実現する授業実践、教育機会のさらなる充実 (2)DPを起点とする学修成果の可視化と測定・評価の検証★ (3)学修ポートフォリオ・学生情報の統合の検討★ (4)学生参画における教育の質保証の方法の検討★ (5)オンラインツール等を活用した授業形態、教育機会の推進★ (6)オンラインツールの利用を含むFD・SD活動の推進 (7)高大接続改革を踏まえた初年次教育の充実 (8)単位制度のさらなる実質化に向けた施策の推進(学生支援) (9)課外活動の活性化・適正化 (10)多様な学生のニーズへの支援と学内連携の強化★	

大東文化大学第一高等学校	
1.「大東一高 VISION 2033」の構想の具体化と実践 (1)VISION 2033を基盤に、中堅進学校として発展するための具体的な将来構想の策定とその推進★ (2)自己の在り方や生き方を考える力を育む探究プログラムの実践 (3)国際理解教育の新たな機会としての海外修学旅行の実施 (4)高大接続、7年一貫教育を踏まえた連携の推進 (5)浦和グラウンドの環境整備(人工芝敷設等)に向けた取り組みの進展★ 2.学習活動の充実 (1)学習指導の充実と学力向上をめざした評価方法の見直し★ (2)ICT教育の一層の推進★ (3)大東スケールテストの活用による学習成果・学習到達度の向上 (4)学力定着に結び付く自宅学習のあり方の検討★ (5)アクティブラーニング研修など、「わかる授業」を目指した研修と実践の推進 (6)生徒の読書量、語彙力改善のための取り組みの推進 (7)学力向上のための計画的なPDCAサイクルを意識した指導の定着 (8)客観的な指標に基づく学力の検証と向上に向けた具体的な計画の立案★ (9)生徒の各種資格取得に向けた組織的な支援体制の整備 3.進路指導の充実 (1)高い進学意識を醸成させるための戦略的取り組み★ (2)進路指導部との連携強化による個に応じたきめ細かい進路指導の実践	(3)3年間を通じたキャリア教育の推進 4.生徒指導の充実 (1)挨拶のできる生徒を育てるための指導の推進★ (2)基本的生活習慣やマナーの確立に資する指導の充実 (3)ネットトラブル等の未然防止のための指導の推進 (4)学校行事等における生徒の自主的・主体的な活動の積極的な奨励による学校の活性化★ (5)学校生活の充実と情操教育の推進のための、新たな学校行事の検討 (6)社会貢献活動への参加促進による社会性・人間性の育成 5.生徒募集の充実 (1)学校説明会並びに志願者増に向けた本校の魅力・特色等に関する情報発信のあり方の再検討 (2)PTA並びに同窓会との連携強化による効果的な志願者募集活動の実施 6.業務の円滑な遂行と組織力の向上 (1)有為な人材確保を目指した教員採用計画の検討 (2)PDCAサイクルに基づいた自己点検評価活動の維持と実践 (3)事務室業務の効率化と業務体制の改善 (4)管理職と教職員が協働して良好なコミュニケーションと寛容さを持った組織体制の構築、風通しの良い職場作りの推進★ (5)時間外労働や休日労働の削減による労働環境の改善

大東文化大学附属青桐幼稚園	
1.「ひとを育てる青桐の教育」の実現 (1)学びに向かい合う力・人間形成の基礎を育成 (2)大学附属幼稚園としての特色の伸長 ①2歳児受け入れ体制の強化★ ②すくわくプログラムの推進 (3)社会、地域の要請に応える新たな幼稚園教育への挑戦 ①子育て支援の充実 ②こども誰でも通園制度の実施・多様な他者との関わりの機会の創出事業の拡充	2.安心・安全に配慮した教育環境の整備 (1)安心安全で魅力的な幼稚園環境の整備 (2)安全教育的推進 3.質の高い教育を実現するための管理運営 (1)経営基盤の礎となる財政基盤の確立 ①2歳児受け入れ推進事業の構築 ②小規模保育園との連携 (2)教職員の積極的な研修会への参加

法人事務局	
1.学園の将来像を実現するための戦略的取組 (1)今後のブランディング戦略及び広報活動の検討★ (2)キャンパス将来構想の検討★ (3)「DAITO VISION 2033」運営・ガバナンス分野における進捗管理 2.運営課題への取り組み(組織と環境) (1)業務効率化と組織の再編 (2)教職員の働き方改革の推進★ (3)教育環境の充実★	3.ガバナンス課題への取り組み (1)改正私学法及び新寄附行為に基づく新たな理事会運営★ (2)中長期財政計画に基づく財政基盤の確立★ (3)コンプライアンス及びリスクマネジメント管理体制の強化による内部統制システムの充実 (4)適切な情報公開と戦略的な情報発信

“河越”の可能性を探るプログラム 新たな川越観光へ向けた提言続々

文学部歴史文化学科・落合義明研究室主催のシンポジウム「川越の観光を“河越の歴史”から考える」(後援:一般財団法人リモート・センシング技術センター[以下RESTEC]、川越市、NHKさいたま放送局)が1月25日、ウェスタ川越で開催された。近年、多くの観光客が訪れる川越の蔵造りの街並みに対し、歴史的背景である“河越”の視点から新たな観光の可能性を探ることを目的としたもの。長時間にわたるプログラ

ムは、後援のNHKさいたま放送局キャスター・今村明子氏の進行により円滑に進められた。

開会にあたり、RESTEC

理事長・池田要氏、森田初恵川越市長、本学の高橋進学長が挨拶。続いて、東京大学の高橋慎一郎教授が基調講演を、本学学生が学生ガイドの取組について研究報告を行った。午後は、川越市役所観光課、教育委員会文化財保護課の職員が、観光施策や歴史遺産の取り組みを紹介した。続いて、本学の野瀬元子歴史文化学科教授、宮瀧交二同学科教授、落合教授が観光学・歴史学の立場から報告を行い、最後に登壇者全員によるパネルディスカッションが実施され、いまだ知られざる“河越の歴史”の解明の可能性と、その観光活用の可能性について、新たな提言がなされた。



歴史学・観光学双方の研究者が川越の可能性を提言



学生ガイドによる研究報告を実施

2025年度募金の報告

本年も充実した奨学金や活動支援、より良い教育環境を学生たちへ届ける100周年記念事業募金を募集しました。

この募金の使途は、①大学全体への支援(使徒を指定しない支援)②学生支援③海外留学支援、④学術・所蔵資料保存支援⑤陸上競技部(男子長距離・駅伝)支援⑥ラグビー部支援⑦スポーツ系活動支援⑧文化系活動支援⑨キャンパス整備支援の9種類から選択でき、2025年度の募金実績は下記の通り。

【100周年記念事業募金】
 寄付件数 541件
 寄付金額 25,224,570円

【100周年椅子募金】
 寄付件数 3件
 寄付金額 1,500,000円

【大東古本募金】
 寄付件数 30件
 寄付金額 110,030円

受け継ぐ書の心——小学生の感性が光る書き初め大会



1月25日、大東文化大学板橋キャンパスにて「板橋区書き初め大会in大東文化大学2026」が開催された。板橋区立小・中学校に通う児童・生徒が対象で、約220名が参加。後日、審査会を実施。区長賞や学長賞などの優秀作品を決めたほか、特別座談会も催された。



〈座談会 参加者〉※敬称略

坂本 健(板橋区長)

長沼 豊(板橋区教育委員会教育長)

橋本 準一(大東文化大学第一高校 校長)

高橋 進(大東文化大学 学長)

河内 君平(大東文化大学 副学長)

植松 龍祥(大東文化大学 書道研究所所長)

——今回の書き初め大会の狙いを教えてください。

高橋学長：地域とのつながりを深めることが大きな目的です。板橋区と協定を結んでから、大学として地元をどう盛り上げていくかを考えてきました。そのなかで、本学の強みである書道を、子どもから大人まで幅広い人に体験してもらいたいと思っています。

坂本区長：今回は100周年事業の延長線上にある取り組みです。大東文化大学と板橋区、そして地域の皆さんで、何らかの形としてこれからも続けていければと思っています。

高橋学長：書道は子どもたちにとって学びになります。ただ上手に書くためだけではなく、年の初めに「自分はこれから何をを目指すか」を考えるきっかけにもなる。こうした体験が、文化の継承や子どもたちの成長につながっていくのではないのでしょうか。

植松所長：本学としても、これまで区内の小・中学校に書き初め指導に伺ってきました。その積み重ねが、今回の大会を実現させたのだと思います。

河内副学長：書き初め大会を通じて、本学がコミュニケーションの場として機能していることを実感しましたね。いまは文字を書くこと



いう行為そのものが本当に貴重。効率化が進み、手書きの機会が減っているなかで、あえて筆で書くという体験はとてもの尊いものです。長沼教育長：一画一画を意識して書くことで、文字そのものへの理解や、日本語への興味が広がっていきそうです。そこに教育的な意義を感じますね。

橋本校長：壇上に立って、子どもたちの素直で真剣な眼差しを受けたとき、言葉が一瞬出なくなるくらい圧倒されました。あまりに謙虚でまっすぐな雰囲気は驚いて、最初の挨拶が飛んでしまったほどです(笑)。うちの高校生が書道パフォーマンスを披露したのですが、彼らも「子どもたちの真面目な姿勢に心が洗われました」と言っていましたよ。

長沼教育長：あのパフォーマンスで、高校生のお兄さん、お姉さんに憧れを抱いた子どもが多かったのではないのでしょうか。身近な目標を持つことから、文化の継承ははじまるのだと思います。

——子どもたちの書に触れて、どのような印象を抱きましたか。

高橋学長：どの作品も本当に多様で、書いている子の性格がそのまま字に投影されているかのようでした。これは大学のゼミでも同じで、学生と「生活メモ」をやり取りしていると、気分によって文字や文章の調子が変わるんですね。その根っこにはやはり「書」の力があるのだと感じました。

河内副学長：同じ学年でも、技術の差に開きを感じる場面が多々ありましたね。一枚で渾身の作品を書き上げる子もいれば、五枚書いてもまとまらない子もいる。また、慣れていないほど迷いがなく感じました。やはり日ごろの練習量がそのまま表れているのだと思います。

坂本区長：私自身も区内の書道展に出品しているので、今回参加した子どもたちの気持ちはどこか理解できるところがあります。日ごろの練習はもちろん大切ですが、あのような大きな会場で書く経験は、本人を大きく成長させる力があると実感しました。



長沼教育長：区長賞と教育長賞に選ばれた「緑の大地」の二作品が並んでいる光景からは、力強いメッセージが伝わってくるようでした。板橋区が掲げる「緑と文化のかがやくまち」とも重なりましたね。

橋本校長：日常生活のなかで、何かに真正面から向き合う機会というのは、意外と多くありません。半紙を前にして思案したり、筆が途中で止まってしまったり——そうした迷いや葛藤が作品の随所ににじんでいるように感じました。「やはり書道教育は大切なのだ」と胸に迫るものがありましたね。

植松所長：おっしゃる通りで、どの作品からも語りかけてくるような熱や思いがありましたね。実際に選抜となると本当に悩みました。どれもよく見えてしまって、線一本の違いにまで心が揺さぶられるんです。

——現在「書道」がユネスコ無形文化遺産の候補に挙がっています。書道研究所としても期待する部分大きいのでしょうか？

植松所長：日本の文化といえば「書道」は、華道や茶道と並んで必ず名前が挙がりますよね。社会全体で見ても筆をとる時間は減っていますが、それでも皆さん口をそろえて「書道はいいものだ」とおっしゃる。その「いいもの」、つまり伝統文化を未来へ残していくことは、本学の使命だと思っています。

橋本校長：海外でも日本文化イコール書道と、広く浸透しているように感じます。当校は韓国とカナダに姉妹校があり、交換留学生に書道を体験してもらうのが慣例になっていますよ。

植松所長：中国の書道はすでに無形文化遺産に登録されていますが、「書き初め」のように日本独自の書の文化も数多くあります。やはり、そうした伝統をしかるべき形で後世に伝えていかなければなりません。

坂本区長：中国では、書道が生活に根づいていると感じます。北京市を訪れた際も、公園の石畳で水を使って書を楽しむ人たちの姿を多く見かけました。板橋区でも、公園の舗装を工夫して「水書き」ができるようにするなど、街そのものをキャンパスに見立てた取り



組みができないかと考えています。区として「いたばし創造都市宣言」を発表したばかりですが、その一端を担う存在こそ書道であり、大東文化大学なのだと思っています。

——長沼教育長と橋本校長にも大東文化大学に期待することを伺いたいです。

長沼教育長：これまででも大東文化大学の先生方や学生の皆さんには、学校での書道指導から生涯学習の講座まで幅広く支えていただいています。今後は交流をさらに深め、指導者向けの書道講座にも挑戦したいです。

橋本校長：本校と大東文化大学は「高大連携」を掲げており、とくに書道は両校をつなぐ大きな接点になっています。書道部の生徒にも大東文化大学の書道学科を志望する子が増えており、今後も書道の一つの柱として、より強い連携へと発展させていきたいです。

——最後に学長、副学長、所長に今後の展望をお聞きしたいと思います。

河内副学長：教育長がお話くださったように、指導者向けの講習会など新たな展開を進めたいと考えています。小中高で「書写」を担当する先生方に、書道研究所や書道学科の教員が講習を行い、日常の授業でより熱意をもって指導していただけるよう支援していければと思います。また、板橋区のクリエイティブシティにも積極的に参画していきたいです。

植松所長：本学では毎年「全国書道展」を開催しています。今後は地域との連携をさらに深め、いつか「区長賞」や「教育長賞」といった枠組みも設けられればと考えています。個人的には、区長にもぜひ特別出展していただきたいですね。

高橋学長：地域と相互に貢献しながら発展していくことは、これからの大学のあるべき姿だと考えています。書道を通じて積み重ねてきた「点」の取り組みが、今回のようなイベントで「面」となり、さらに指導者育成など立体的な広がりへと発展していく。板橋区のまちづくりとも結びつくことで、より大きな力になるでしょう。区とも積極的に関わり、地域とともに歩んでいきたいと思っています。



月刊「大東書道」毎月刊行中

大東文化歴史資料館にて開催中



大東文化歴史資料館 企画展についてはこちら

大東文化大学高校生のための書道講座【特別編】

筆を持たない書道講座

(※一般・中学生以下も参加可能)

日時/2026年5月16日(土) 10:00~15:15(16:20)

場所/大東文化大学 板橋キャンパス

書道講座の詳細はこちら➡



経営学部の授業「問題解決法B」って？ 実践をととして社会で求められる問題解決能力を養う

大東文化大学の大きな特長の一つが、科目の豊富さにある。学生たちの多様な進路に応えるため、幅広い学びの機会が用意されている。今回は数ある授業のなかから、経営学部経営学科の「問題解決法B」に着目した。同授業では、大学と企業が連携し、受講生に実践的な学びを提供している。本記事では、「問題解決法B」の具体的な授業内容や狙いについて、授業を担当するダレン・マクドナルド教授と、協力企業の社長である小倉希氏に話を聞いた。

「問題解決法B」とは

今年度の「問題解決法B」では、株式会社エス・アイザックス商会の協力のもと、学生がグループを組み、同社の商品販売に取り組む。販売は、各グループが企画したECサイト上で行われ、販売促進の手法はオンライン・オフラインを問わない。自ら立てたマーケティング戦略がどのような成果を生むのかを、実際の市場で試すことになる。また、担当商品の売上の一部が学生に報酬として還元される点も特徴の一つ。「自分の行動が消費者に届けば報酬が生まれる」という、ビジネスの基本原則を体験できる仕組みとなっている。

「問題解決法B」で、株式会社エス・アイザックス商会と連携することになった経緯を教えてください

ダレン教授:今年度の授業内容を検討するにあたり、私は「成長意欲はあるけれど、何にチャレンジしたらいいかわからない」と感じている学生が多いことに着目しました。近年の学生たちを見ていると、実践的な経験を積みたいという傾向が強まっていると感じます。しかし一方で、その意欲を具体的な行動に結びつけられずにいる学生がたくさんいます。

そこで、私の30年来の友人であるエス・アイザックス商会の小倉社長に協力を仰ぎました。彼の会社の事業の一部を、学生たちに体験させてあげられないかと考えたんです。小倉社長は快く引き受けてくださり、ECサイト上で実際に商品販売する授業を実施できることになりました。学生たちに「次のステップに進むチャンス」を与えられる授業を実現でき、とてもうれしく思っています。

小倉社長はどのような想いで授業に協力されているのですか？

小倉社長:授業への協力を決めた理由はいくつかあります。

ひとつは、私自身も経営者の視点から、若い世代の問題解決能力を育成する必要性を強く感じていることです。社会に出れば、誰もが必ず壁に直面するもの。そのときに自分で問題を整理し、解決していける人材は、業界や業種を問わず活躍できるでしょう。大学の授業でチャレンジングなマインドを育てることは、日本社会を強くすることにもつながると考えています。

また、これからの時代の企業は、利益追求だけをしてはいられないわけではありません。売上を出す以外の軸で、企業の存在価値を見出すことが求められています。そんな中で当社に何ができるだろうと考えたときに、私は「人を大切にすること」ではないかと考えました。当社は創業160周年を迎える老舗企業ですが、その長い歴史を紡いでこられたのは、たくさんの人に支えてもらったからです。これからの時代を背負う若い人を育てることは、回り回って当社を、ひいては社会を支えることにつながると信じていることも理由です。

学生たちや社会への貢献のために協力を決められたのですか

小倉社長:少しでもみなさんのお役に立てるとうれしいです。

でも、授業で得るものがあるのは学生だけではないとも感じています。私たちも、若い世代の方々がどんなことに興味をもち、どのように考えるかを間近で見させてもらい、勉強になっていますよ。

学生の指導にあたって大切にしていることを教えてください

ダレン教授:問題解決能力を鍛えるためには、授業の主体はあくまでも学生でなければならないと考えています。そのため、「私が学生に教える」のではなく、「学生が自ら立てた



ダレン・マクドナルド教授

専門は人的資源管理論。現在は、日本の組織における多様性を活かすダイバーシティ経営の実証研究を行っている。教授就任以前は、音楽プロモーター、ラジオ番組の制作出演、マーケティング企画、商品開発などに携わっていた。



小倉希氏

貿易商社「株式会社エス・アイザックス商会」の代表取締役社長であり、ゴルフのドライビングコンテストのプロでもある。エス・アイザックス商会では、輸出入事業のほか、自社企画ブランドの商品も多数展開。

目標を実現するためにサポートする」という意識をもって教鞭を執っています。イメージとしては、「先生」よりも「先輩」に近い存在でありたいと考えていますね。

小倉社長:私も学生たちの主体性を引き出すサポートを心がけています。

例えば、授業時間外でも学生の質問に答える体制を用意しました。当社の営業時間内であれば、スタッフがタイムリーに回答しています。その狙いは、みなさんにモチベーションを高く保ってもらうことです。疑問やアイデアが浮かんでも、週1回の授業でしか回答を得られなければ、どうしてもモチベーションは低下しやすくなります。障壁を迅速に取り除いてあげることで、スピード感をもって前に進んでもらえるようにしています。

「問題解決法B」の授業をととして、学生にどのような気づきを得てほしいですか？

ダレン教授:私は常々「挑戦しないとわからないことがある」と思っています。自分で行動を起こして、壁にぶつかって、初めて自身の得意、不得意に気づけるもの。何もしなければ、「自分は何ができないか」すらも永遠にわかり

ません。学生たちには本授業をととして、自分への理解を深めてほしいと願っています。

小倉社長:日本には今18,000を越える職業があるといわれています。それだけたくさんの方の選択肢の中から自分の適性や興味にできるだけ合う職業を選ぶには、ダレン教授の話とおり経験から自分を知っていくことが重要になります。この授業が、そんな経験のひとつになればと思っています。

最後に、学生たちへのメッセージをお願いします

ダレン教授:みなさんには、大学での勉強をととして挑戦を重ね、自らの魅力を知り、納得のいく将来を選択してほしいです。そんな自分を知るための挑戦は、早く始めた分だけ、魅力を発展させることに時間を割きやすくなります。「いつか」ではなく、ぜひ今から始めてみましょう。

小倉社長:大学時代は、勉学に励むと同時に、社会に出る準備もしなくてはならない時期です。自分と腰を据えて向き合い、これから進む道についてじっくり考える時間もぜひつくってください。

食品ロス削減を目指して、学生たちがレシピを開発

大東文化大学では、SDGs(持続可能な開発目標)推進の一環として、家庭で余りがちな食品を持ち寄り地域へ寄付する「フードドライブ」を継続的に実施している。学内の学生・生徒・教職員から集まった食品は板橋区を通じて「フードバンク板橋」へ届けられ、子ども食堂や生活困窮者支援団体などで活用されている。取り組みは、SDGsの「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「つくる責任つかう責任」「パートナーシップで目標を達成しよう」に貢献する活動として位置づけられている。

集まった食品を活用したレシピ開発にも学生が挑戦した。食品リストを調査し、家庭で使い切れず残りがちな食材を有効活用するメニューを検討。健康面にも配慮しながら、実際に調理まで行った。蕪木智子教授(健康科学科)もサポートを担当し、食材の組み合わせや調理



ふりかけとパスタを組み合わせた「ゆかりパスタ」

方法について学生を指導した。

紹介されたレシピには、大根の葉を加えて栄養価を高めた「大根の葉入りたこ焼き」や、寄付されたパスタとふりかけを組み合わせた手軽な「ワンパンゆかりパスタ」などが並ぶ。いずれもアレンジ性を重視した工夫が施された。

調理実習では、普段交流の少ない学生同士が協力しながら作業を進め、食を通じた自然なコミュニケーションが生まれたという。また、食材の特徴や栄養について学びながら調理することで、食品ロス問題を自分ごととし

て捉える契機にもなった。今回の取り組みは、単なる寄付活動にとどまらず、学生が主体的に「もったいない」を「おいしい」に変える体験を通じて、持続可能な社会づくりへの理解を深める機会となった。大学では今後も、学生参加型のSDGs活動を学内外へ広げていく方針だ。

調理実習では、普段交流の少ない学生同士が協力しながら作業を進め、食を通じた自然なコミュニケーションが生まれたという。また、食材の特徴や栄養について学びながら調理することで、食品ロス問題を自分ごととし



食を通じて食品ロスの重要性を学ぶ

蕪木教授の話

「家で余りがちな食材を美味しく変身させる工夫」と「みんなで楽しむ食卓」を意識しました。パスタや粉類など、家庭でストックしていてもなかなか使い切れない食材をベースに、普段は捨ててしまいがちな「大根の葉」をあえて組み合わせることで、食材を無駄なく、かつ栄養価を高めるアイデアを取り入れました。また、ホットケーキミックスで「たこ焼きパーティー」をするなど、みんなでワイワイ楽しめるような「食の広がり」を提案することを目指しました。

武蔵国「入間郡、みよしのの里」はどこにある？ —『伊勢物語』在原業平が「東下り」で歩いた道を探して—

大東文化大学は「教育の大東」。学生たちは、副免許として幅広い教科の教員免許を取得することができる。坂戸育ちで坂戸西高校出身の坂西奏人君も、入学当初は好きな社会科の副免許を取ろうかと迷っていたが、最終的には、日本語学科で取得できる中学・高校の国語科免許に専念する道を選んだ。この選択は、彼自身の4年間の学びを深め、4年生での卒業研究へとつながってゆく。

坂西君が取り組んだ研究テーマは、地元・坂戸に関わる『伊勢物語』「東下り」の歴史地理である。在原業平は貞観4年(862)初夏の頃、騎馬で東国へ向かったとする角田文衛氏の説がある。第十段「たのむの雁」で「入間の郡、みよしのの里」にたどり着いた「男」は、地元の女に言い寄るが、女の母は藤原氏で、娘を中央貴族に嫁がせようと、娘に代わって「男」に歌を贈り、「男」も返歌を返す。みよしののたのむの雁もひたぶるに 君が方にぞよると鳴くなる わが方に寄ると鳴くなるみよしのの たのむの雁をいつか忘れむ この「たのむの雁」の和歌二首にちなんで、明治22年(1889)、川越市に「田面沢」という新たな地名が誕生した。



では、『伊勢物語』の舞台「入間の郡、みよしのの里」は何処なのか。比定地には、坂戸市三芳野村、川越市伊佐沼・的場・吉田の四説がある。残念ながら、坂西君の地元・三芳野も『伊勢物語』にちなんで、明治12年(1878)にできた新しい地名であった。

坂西君は、古代官道「東山道武蔵路」に注目する。「駅長」の墨書土器が出土したJR宇都宮線「栗坂」の加須市北下新井「若宮八幡宮」は、古代駅制の駅家跡とされる。「東山道武蔵路」で繋がる東武東上線「若葉」駅近くの大規模集落跡「若葉台遺跡」からは、8~9世紀後半の帯金具・奈良三彩・硯・青銅の鈴等が出土し、都の文化が伝わっていたことが確認された。在原業平は「東山道武蔵路」のこの付近を通して、陸奥の国へと向かったのではないかと。川越城内には三芳野神社があり、芳野の地名がある。

4月から、坂西君は坂西奏人先生となって、地元さいたまの高等学校の教壇に立つ。大東での学びが、坂西先生の授業の中に生かされ、生徒たちの地域へのまなざしを育む日も近い。(僊)

プロムナード

最近、「自分の転機は〇〇だった」という話をよく目にする。就職や転職、留学、病気、あるいは一冊の本との出会い。そこから人生が一気に開けた、という語りである。聞いていて心地よいし、確かに納得感もある。

けれども、どこかで小さな違和感を覚える。人生は本当に、そんなふうの一つの出来事を軸に整理できるものだろうか。

多くの場合、日々の選択はもっと曖昧で、消極的で、偶然に左右されている。後から振り返ってみて、ようやく一本の筋が見えるだけではないか。にもかかわらず、語りの場に出てくる人生は、たいていきれいに起承転結が整っている。

自己啓発書やキャリア論では、こうした「物語化された人生」が模範として提示される。読者は勇気づけられるが、その一方で、「自分には語るべきストーリーがない」という不安も生まれる。物語を持っていない人生は、どこか劣ったも

のよう感じられてしまう。

物語そのものが悪いわけではない。人は経験を語ることで意味を与え、前に進むことができる。ただ、語られた物語があまりに整いすぎているとき、そこからこぼれ落ちた迷いや停滞、判断ミスが見えなくなる。

とりわけ近年、大学教育においても早い段階から明確な「将来像」を描くことが求められる。しかし、人生は設計図どおりに進まない。むしろ遠回りや寄り道の中にこそ、後から意味づけられる経験が潜んでいるのではないだろうか。

人生は、あとから物語に見えるだけかもしれない。そう考えると、今この瞬間の不格好さや中途半端さも、少しは許容できる気がする。物語は励ましにはなるが、人生そのものを代表しているわけではないのだから。(四阿)

『人生はあとから物語になる』



桐風

新入生・新人職員諸姉に心よりお祝い申し上げます。メールやLINEで間に合う今日と異なり、桐風子が現役の頃には、合格祝いの祝電というので「サクサク」の五文字が届けられたものである。もの本によれば、この五文字の発案者は、一九五六年、早稲田大学の部活生諸君だったという▼「花見」は春の行事としてすっかり定着しており、政府(気象庁)が「開花宣言」するなど、日本人にとってサクラは特別な花のようである。それはどのような理由によるのであろうか。桜は冬には全ての葉を落とし寒々とした風情となる。春の足音をいち早く聞き取って芽吹き、蕾は日一日と膨らむ。開花を迎えるとピンクの花が一気に爛漫と咲き誇る。老若男女が花の下で宴席を張るのはこの頃である。次いでちらほらと落花が始まると、風に舞う桜吹雪が目を楽ませしてくれる▼こうした経緯が示唆するように、桜と日本人の精神性については両極端の側面を

見落としてはなるまい。一方には【花の下赤の他人はなかりけり】という小林一茶の名句に象徴されるように、爛漫と咲く桜の花を愛で楽しみ遊ぶ老若男女庶民の姿がある。他方の極には、新渡戸稲造の『武士道』にいうように、現世の執着を捨て、義のためならば逍遥として命を捨てる武士の美学がある▼昨今、地球環境の変容の一環として、わが国が「二季の国」になりつつあるとする言説がある。春と秋という二つの季節が姿を潜め、猛暑と極寒という二季が支配的になるというのである。確かに、六月には早くも猛暑が訪れ、十月には寒気に震える日々を迎えるなど「二季説」の説得力には侮り難いものがある▼それでも、日本人の心の花ともいべき桜は咲くのを忘れはすまいと期待したい。南の沖縄から、北の北海道まで日本列島を染め上げる「桜前線」は単なる時候ではなく、日本人の心をつなぐ絆でもあるのだから。【水溫む厨の音も和らぎぬ 双掌】(素録)

ウォッチング……………27

未完のサイドストーリー——春の公園にて

中村邦生



春陽の公園にて(埼玉県桶川市)

創作への気分が動き始めたとき、私にとって大事な場所は、喫茶店と公園のベンチである。そこでの読書やノートの時間、あるいは放心のひと時、記憶とも夢想とも感じられるねっとりした思念が、一つの物語のように誘い出されることがあるからだ。

ある春の日、文学賞選考の議論の熱を心身に残したまま、埼玉文学館に隣接した児童公園のベンチで遊具を眺めていた。すると著者『チェーホフの夜』をめぐる懐かしい思い出がよみがえってきた。

二十年ほど前になるが、私は本気なような悪戯のような文

面の封書を受け取った。刊行して、半年ほどたったところで、「不思議な偶然があったのでお知らせします」と蟻の話が記してあり、『チェーホフの夜』から木曾の山小屋での原稿執筆の場面が引用してあった。

〈山蟻が三匹連れ立ってテーブルの端から現われ、原稿用紙の罫線の縁を忙しく触角を動かしながら横切った。蟻たちの移動の時間をやり過ごしてから、私はペンを握った。〉

手紙で「不思議な偶然」と書いているのは、ちょうどこの箇所を読んでいるときに、どこに潜んでいたのか蟻たちが本から現われ、行列をなしてページを横切ったという出来事のことだ。

〈(前略) このことに驚き、偶然の面白さに心ひかれ、ぜひとも作者にお知らせしなくてはと思ったのです。しばらくすると、また同じことが起こりました。こんどは蟻が目に見えない巣からどンドン湧き出してくる感じで、すっかり気味悪くなりました。正直申し上げて、実に迷惑な本となりました。どうかしりと要求したいわけではありません。ただ、こうした事実をお伝えしたかっただけです。〉

差出人の住所は、栃木県足利市の町名番地まで記してあるのに、名前は「アリガ・アリヤ」とカタカナ書きの偽名になっていた。このまま宛先を写せば、意外に返信は届くかもしれ

ないと、しばらく思案した後、私は返信を書くことにした。

〈蟻の発生の対処法は判りかねますが、原因としては当該ページに蟻の出没する穴があるためかもしれません。中黒「・」のようなものです。どこかに見つかりませんか。ないとすれば、穴のような形態を持つ字はたくさん存在します。そこかもしれません。「あ」「な」という活字でさえ、よく見れば丸まった小さな穴のような部分が見つかります。とりわけ、「の」が何やら最も不吉そうな、穴っぽい形を保持しています。思い当たるところがありましたら、早急に修正液で白く塗りつぶすことをお勧めします。〉

手紙が届くような気がした。三週間過ぎたころ、意外な展開があった。かつて私の授業に出ていたA君がメールで詫言を言ってきたのだ。「すみません。小説から本物の蟻が湧き出したという、悪ふざけの手紙を出したのは私です」とあっさり白状。A君は内田百閒やボルヘスという異能の作家を愛好していたが、卒業後は帰郷して栃木県某町役場の職員におとなしく取まっていたはずだ。奇想小説好きのA君なら、早々と正体を明かさずに、もう何通か遊戯心を凝らした手紙をよこしてもよかった。惜しいことだった。それがあれば、『チェーホフの夜』の愉快的サイドストーリー(和製英語なので、スピン・オフというべきか)が生まれたかもしれない。



『月光の仕事——中村邦生小説選』

中村 邦生 (本学名誉教授) 著 国書刊行会刊

由緒ある文庫レーベルの最も厚い本について聞いたことがある。それはあるノーベル文学賞受賞作家の自選短編集なのだそうだ。「自選」というだけに、収録作の選定は作者の意向次第なのだろうが、きらめく作品群をひとつも取りこぼしたくないというのは刊行する側も同じ思いだろう。初期の名作、作家的な腰が定まった秀作、晩年の実験的作品。それらすべてを味わえるというなら注目も集まる。もちろん、多少厚くともそれを望む読者は自然と欲がふくらむ。大著になるのも必然といえる。

それを思えば、本書を評するにあたって、まずは書籍としてのその重厚さから始めることも許されよう。本書は大東文化大学名誉教授である中村邦生氏の約三十年分の作品をほぼ俯瞰した小説集である。文学界新人賞受賞作から芥川賞候補となった二つの作品、最近作まで収載した縦書き三十作品635ページ。長篇『ブラック・ノート抄』からの抄録の掌編八作品32ページは、地色の違う茶色の紙に書かれ、本の小口のリズムを視覚的に心地よく変える。計664ページの函入りである。選集をめぐる作者と出版社、読者の企みの濃密さが、その重量感に結実している。だが、物理的な迫力に驚かされつつも、読みはじめれば夢幻めいた世界に放り込まれ、両手の重さも忘れてしまうことを請け合おう。いずれの作品も五感を刺激する風物の巧みな描写、他者や記憶との曖昧だが切実な距離感、静かに異界に足を踏み入ってしまったような奇妙な味わい、それらを思わず笑い出してしまふような様々な声色の語り口で存分に堪能することができる。

内容はIからIVに章立てられている。大まかなモチーフやその取扱

いによって分けられているのだろう。表題作「月光の仕事」から始まることから明示的だが、月などの印象的なモチーフに幻惑されるI。夜や暗がりの安らかさと熱を感じるII。横書きの「〈ブラック・ノート〉より」もここに入る。転じてIIIは、芥川賞候補となった二作品「ドッグ・ウォーカー」と「森への招待」を筆頭に、登場人物のすれちがみや対話の違和感によって生の輪郭が繊細に描かれた作品が多い。IVは記憶をめぐる痛切さが甘美な掌編が中心となっている。いずれの章も発表年代による区分というわけではなく、90年代の作品に近作が併置されていることもある。個人史的な位置ではないことで、かえって初期の作品が持つ小説としての現代性が浮かび上がってくる編成といえよう。また、それは過去の代表作とされる作品に最近作が熱っぽく呼応することをも意味する。「未完は始まりも終わりもなく、ときに完すらも装いつつ、のうのうと生き延びる」というのは本書を締めくくる「バス停にて」の一節だが、その初出は二〇二五年の四月である。作品としての終幕を装いつつ、物語は続く。今後の氏の仕事を保証する心強い宣言として受け取りたい。

名うての読み手である柴田元幸による巻末の解説を一箇所だけ借りたい。「この作品集が、独自の小説倫理と美学と魅力を有するこの書き手の正当な評価に向かう、大きな一歩となることを願う」。人類で初めて月に降りた宇宙飛行士の言葉を踏まえてのものだろう。氏の作はまだまだ探索すべき内奥が秘められている。一人でも多くの人がそれを感じてほしい。

評
高山 敏幸
(岐阜第一高等学校教諭)

ぶつくれびゆー Book Review

『人々の暮らしぶりから考える 中国経済はどこまで独特か？官と民のせめぎ合いで読み解く経済学』

岡本 信広 (本学国際関係学部教授) 著 白桃書房刊

中国経済は1978年以降、高度成長を遂げ、2010年にGDP規模で世界第2位にのし上がった。著者は、中国経済を西側先進国とは異なる「社会主義と市場経済が共存した独自の体制」下にあると位置づけ、「政府が強力に経済をコントロール」(286頁)すると特徴付ける。本書は「官(政府)と民(市場)のせめぎ合い」を切り口に、独自の体制、特徴から生まれる中国経済の多面性について一般読者への理解に挑戦している。

一般読者に親和的な著書に仕上げるために、著者は独自の工夫を施している。各章の冒頭では、年代・性別・職業を超えた5人の仮想民衆が、テーマに沿った中国の実情をインタビュー形式で語り、読者に「人々の暮らしぶりから考える」というリアル感を与えている。章末では中国経済を偏った見方でなく、経済学という客観的なツールで因るために、経済学キーワードを解説し、中国の実態に当てはめる工夫を凝らしている。

本書の前半では、政府が市場に対して親和的政策を打ち出すことや市場からの退出により「民間が活躍していく過程」(第2～5章)を「せめぎ合い」の切り口から論じている。後半では市場の失敗、反親和的政策といった「政府が関与する過程」(第6～9章)として、格差、環境保護、人口動向、統治を取りあげ「せめぎ合い」をリアルに描いている。さいごに、中国経済の現状と課題(第10章)を提示している。

さて、評者は当初「せめぎ合い」という言葉について、対立的な意味合いと受け取ったが、よく拝読すると多義性をもつ言葉だと捉え直した。例えば、官が新しい政策により民に一定の自由を与えビジネスチャンスや所得向上の御膳立てをすること、利益を獲得したい民が不透明な政策に内

在する文脈把握のために官に近づくこと(結果、癒着・汚職が頻発)など「せめぎ合わない」関係性も含まれる。また、経済発展により顕在化した環境問題に対して、民に「せめぎ合いえない」ほど強力な政府コントロールを突き付ける関係性も含まれる。しかし、政府は企業を完全に潰さず、活躍の場を変える温情政策を内包することもあるし、地方の国有企業然り、様々な意味で必要な産業には余白を与えることもある。そして、人口政策については、民が生きたいときに官は生みすぎないよう一人っ子政策でコントロールしたが、少子高齢化がすすみ、官が生んでほしいときに民は生まないという「かみ合わない「せめぎ合い」」も含まれる。さいごに、中央が地方政府間の競争関係をつくる「官官「せめぎ合い」」もある。中国は中央集権が強いイメージする一方、実は「中央が見て見ぬふり」「地方は積極的に新しい政策を実施」「地方は地方で裁量を発揮」(249頁)ということもある。

習近平政権が発足し14年目を迎え、官の強大ぶり、民の閉塞感や焦燥感の拡大が報じられる。3月開催の全人代では、2026年の経済成長率目標を4.5～5.0%に引き下げ、積年の課題の過剰供給問題こそ触れたものの、景気対策として重要な有効需要の創出に向けた新たな政策を打ち出さなかった。習政権は、民(市場)とどのような「せめぎ合い」関係を設計するのだろうか。著者が創ったこの有効な切り口を使い、評者も今後の中国経済を注視してみたい。本学の教職員・学生・OB・OGには是非ご一読をお薦めする。ご一読の一手手前の方は、著者のSNSやNoteを覗くと、著者のお人柄も垣間見え、著書への関心が高まります。



評
森 路未央
(本学外国語学部教授)

ひつじ書房

●引用やモニタージュを駆使した太宰治の方法論

太宰治のエディタースhip

滝口明祥著 定価3960円

太宰治の作品は、さまざまな「引用」のモニタージュによって成立している。そして、そうした太宰治の作品を複数読むことによって、読者の欲望は太宰治という作家それ自体へと向かうようになる。いわば、太宰治の全作品が「太宰治」を形成するモニタージュとなっているのだ。本書は、そうした仕組みがどのように形成されてきたのかを探るとともに、太宰治の作品の多面性をも明らかにすることとなるだろう。

〒112-0011 東京都文京区千石2-1-2-2F
https://www.hituzi.co.jp/ 〈価格税込〉

オペラ／音楽劇研究の最前線

共鳴する人と社会

佐藤英・大西由紀(大東文化大学専任講師)・岡本佳子・萩原里香・森本頼子 編

オペラ、バレエ、ミュージカル、それらを原作とする漫画まで……複合芸術として自らの裾野を拡大し続けてきたオペラ／音楽劇は、各国の政治情勢、異文化との邂逅、新メディアの隆盛を受けて、どのように変容を重ね、現在にいたったのか。舞台上で、どのように変容を重ね、現在にいたったのか。舞台上で、学術研究でいま追究される課題を、十七名の専門家が多角的な観点から論じる。執筆陣：石井道子・江口大輔・荻野静男・釘宮貴子・小川佐和子・井上登喜子・大野はな恵・山田小夜歌・神竹喜重子・新田孝行・大田美佐子・笠原真理子

A5判上製四二五頁 六五〇〇円＋税

水声社

〒112-0002 文京区小石川2-7-5 tel. 03-3818-6040 fax. 03-3818-2437
ブログ → <http://www.suisheisha.net/blog/>
直接販売は(水声社Web Store)から → <https://comet-bc.stores.jp>

H.D.ソロー：色彩と色合い

大東文化大学名誉教授 奥田穰一 著

詩人ソローの『日誌』を、色という観点で読み解く。美学的な側面のみならず、哲学的な考察も織り込み、色彩にこだわった詩人思想家の本質に迫る。

□四六上製・214頁 定価：本体2,800円＋税
□ISBN978-4-7553-0451-4

音羽書房鶴見書店
〒113-0033 東京都文京区本郷3-26-13
☎03-3814-0491 Fax 03-3814-9250
<http://www.otowatsurumi.com>
e-mail: info@otowatsurumi.com

課題に挑み続ける「防災官庁」の実像を描く！

大東文化大学法学部准教授 若林 悠

気象庁

危機と改革の時代を超えて

四六・248頁／定価4620円

多くの災害に見舞われた平成、令和の時代、気象庁はいかなる変化を遂げたのか。自然災害が絶えない日本で、気象庁はいかなる役割を担い、社会とどのように向き合うべきなのか——模索と挑戦の軌跡をたどる。

東京大学出版会
〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL03-6407-1069 <https://www.utp.or.jp/>

加藤柚帆・加藤貴士が揃って連覇 全日本テコンドー選手権大会



加藤柚帆選手 加藤貴士選手 磯崎翼選手 諏佐人和選手 鈴木小春選手

第19回全日本テコンドー選手権大会が1月18日、愛知県豊橋市の豊橋市総合体育館で開催された。本学テコンドー部からは9名、卒業生から5名の選手が全国の頂点を目指して出場した。

女子53kg級では、加藤柚帆選手(スポーツ科4年)が見事金メダルを獲得。大会3連覇という快挙を成し遂げた。男子74kg級でも加藤貴士選手(スポーツ科1年)が金メダルを獲得し2連覇を達成。また、卒業生も各階級でメダルを獲得し、本学テコンドー部の層の厚さと競技力の高さを示す結果となった。

【大会結果】

女子53kg級	加藤柚帆選手	金メダル ※3連覇
女子46kg級	鈴木小春選手(教育2年)	銅メダル
女子49kg級	富田智咲選手(政治1年)	5位
男子74kg級	加藤貴士選手	金メダル ※2連覇
男子54kg級	諏佐人和選手(スポーツ科3年)	銅メダル
男子63kg級	磯崎翼選手(国際関係4年)	銅メダル
男子58kg級	菅井奏選手(スポーツ科2年)	5位
男子80kg級	舘野大悟選手(経営2年)	5位
男子63kg級	北出達也選手(国際文化4年)	9位

男女で襷をつなぎ、見事2度目の準優勝を獲得



【大会結果】
総合成績 第2位59分43秒(準優勝)

区間	選手名	記録	区間記録
1区(男子3km)	棟方一葉選手(スポーツ3年)	8分09秒	区間3位
2区(女子2km)	相場茉奈選手(教育3年)	6分01秒	区間1位*
3区(男子5km)	松浦輝仁選手(経営2年)	14分03秒	区間3位
4区(女子3km)	平尾暁絵選手(英語3年)	9分47秒	区間7位
5区(男子2km)	上田翔大選手(スポーツ1年)	5分27秒	区間4位
6区(女子5km)	萬野萌々香選手(同3年)	16分16秒	区間3位

*区間新記録

第6回全国大学対校男女混合駅伝競走大会が2月15日にヤンスタジアム長居および長居公園内特設コース(大阪府大阪市)で開催された。2021年に誕生した「全国大学対校男女混合駅伝」は、大学駅伝で世界初の男女混合レースで、全区間計20kmのコースを男女6名が交互に襷をつないでいく。本学としては2度目の出場にあたり、エントリーされた選手全員が初出場となる。計22チームが火花を散らすなか、本学は2区で区間新記録を打ち立て、見事2度目の準優勝に輝いた。

相場茉奈選手コメント

区間新記録と区間賞を目標にしていた、それを達成する事はできたが、城西大学と区間タイということで城西の強さが見え、自分のなかでは勝ち切れるレースが出来なかったと感じた。新チームとしては心を一つにして覚悟を持ち、最高学年になってサラワヅルや野田真理耶など強い選手が沢山いるため自分たちが怪我なく最後まで走りきれるようにしっかりと状態を上げていきたい。

北原、鈴木が優勝、菊池が3位 スピードスケート競技で結果残す

1月31日から2月1日にかけて、群馬県渋川市の高崎健康福祉大学伊香保リンクで開催された「2025/26 全日本選抜スピードスケート競技会 渋川伊香保大会」に本学スケート部が出場し、出場選手のうち3名が優勝および第3位の好成績を取めた。

【大会結果】

競技	順位	選手名	記録
男子1500m	第8位	齊下功聖選手(社会経済3年)	1分55秒19
男子3000m	第3位	菊池仁貴選手(経営2年)	4分16秒34
男子マスタート	第7位	菊池仁貴選手	9分34秒03
女子500m	第1位	北原伊織選手(現代経済3年)	39秒60
女子1000m	第1位	北原伊織選手	1分21秒10
女子3000m	第5位	賀来春音選手(英語2年)	4分34秒16
女子マスタート	第1位	鈴木花梨選手(スポーツ科3年)	12分02秒50

北原伊織選手コメント(写真左上)

大会では、500m、1000mともに優勝できたことを大変うれしく思っている。レース終盤の粘りが自分の課題で、そこに打ち勝つことが結果につながったのだと感じている。喜びを原動力に加えシーズンの最後まで駆け抜けた。

鈴木花梨選手コメント(写真右上)

今回の全日本選抜渋川伊香保大会では、気温が高く氷が柔らかい状態のなかでのレースだった。焦らず冷静に判断し行動できたことが今回の勝因だと考えている。全日本選抜第1戦から第4戦までの総合ランキングでも第2位を獲得できたので、来年度のラストシーズンに向けて日々精進していきたい。

菊池仁貴選手コメント(写真下)

今回の全日本選抜渋川伊香保大会は強風のなかでのレースだった。そのなかでも急にラップが落ちたりせずに残り1周まで滑ることが出来た。最後の1周でラップを落としてしまったが、シーズンラストレースに向け課題が分かりやすい試合になった。



北原選手、3種目で表彰台 成年女子500m優勝



1月31日から2月8日にかけて開催された第80回国民スポーツ大会冬季大会スケート競技会(ショートトラック:青森県三沢市・三沢アイスアリーナ、スピードスケート:青森県八戸市・YSアリーナ八戸)に、本学スケート部が各都道府県代表として出場した。そのなかで、北原伊織選手(現代経済3年・長野県代表)が成年女子500mで優勝を果たし、続く成年女子1000mでは2位に。成年女子2000mリレーでも3位に入り、3種目で表彰台に立つ活躍を見せた。

【大会結果】

成年女子500m	第1位	39秒26
成年女子1000m	第2位	1分22秒16
成年女子2000mリレー	第3位	2分41秒25(長野県チーム[第4走])

49年ぶりの第3位 法政大との接戦制す



2025年12月23日から28日の日程で、第98回日本学生氷上競技選手権大会アイスホッケー競技会が行われ、本学アイスホッケー部は3位決定戦で法政大学と対戦した。試合は第1ピリオドに先制点を許す苦しい立ち上がりとなったが、落ち着いた試合運びで流れをつかみ、同ピリオド終盤に同点に追いついた。第2ピリオドでは攻勢を強め、逆転に成功。その後は粘り強い守備でリードを守り切り、最終的に3-2で勝利した。この結果、1976年の第48回大会以来、実に49年ぶりとなる第3位を達成。長い年月を経て、再び大会上位に名を連ねた。

【大会結果】

- 初戦(6-4 関西学院大学戦)
- 準決勝(2-7 中央大学戦)
- ベスト8決め(4-3 立命館大学戦)
- 3位決定戦(3-2 法政大学戦)
- 準々決勝(4-3 関西大学戦)

「UNIVAS AWARDS」最優秀賞を受賞

3月2日、品川インターシティにて大学スポーツ協会主催「UNIVAS AWARDS 2025-26」表彰式が行われ、本学スポーツ振興センターの取り組みが「大学スポーツプロモート優秀取組賞」最優秀賞に選ばれた。「UNIVAS AWARDS」は、大学スポーツの活性化などにおいて優れた取り組みを行った学生アスリートやスポーツに関わる学生を対象とした表彰制度。スポーツ振興センターは、売上の一部をクラブ運営費用として活用できる運動部別オンラインショップ「My Megaphone!」を展開しており、今回はその取り組みが高く評価され、受賞につながった。



大東スポーツは
スポダイホームページで
(紙面協力/体育連合会スポーツ大東編集部)

